

視

線

橋 左京 作

男の家は大通りに面した日当たり良好な南向きに建つてゐる。この家に住んでいるのは男と妻の二人だ。二人の娘が結婚して家を出てから夫婦二人きりの生活になつた。三十年の住宅ローンが終わつて、名実とも我が家になつたが、四LDKの広い戸建て住宅で生活しているのは、男と妻の二人だけだ。男は昨年十一月、四十年余り勤めた大手自動車会社の製造工場を定年退職した。会社から退職後の再雇用や再就職先の話もあつたが男は断つた。人々自適な生活を楽しみたいと考えたからだ。

男は、退職する三か月前に本社の人事部に呼ばれた。

「野上さんは、この十一月で当社を定年退職されるわけですが、当社の再雇用に申し込まなかつたようですが、退職後のご予定はあるんですか?」人事部長が尋ねた。

高齢者雇用安定法が平成十八年四月に改正施行され、事業者は高齢者の雇用確保のために、六十五歳までの「定年延長」、希望者全員の「継続雇用制度」、「定年の定めの廃止」のいずれかを導入することになった。男の会社では継続雇用制度を導入していた。

「いいえ、特にありません」と、男は答えた。

「それでは、どこか再就職先を検討されてるんですか?」

「いいえ、それもありません」

「それはよかつた。実は、当社の協力工場として部品を提供していれる太田精機の井上社長さんから、野上さんを工場長として迎えたいといふお話をありました。検討してもらえませんか?返事は一週間後で結構です」と、人事部長が言つた。

太田精機は男の工場で組み立ててある大衆車の部品を製造している。男と井上社長は、仕事上、気心が通じる間柄だ。工場長として迎えたい、という井上社長の気持を思うと、簡単には断れない。しかし、人生の半分を自動車の製造現場で過ごした男は、ここで一区切りをつけて、第二の人生は別な道を模索してゐた。男は迷つた。結局、実家にいる親の介護を理由にして、男はこの話を丁重に断つた。

「あなた、ご飯よー」

一階から妻の声がした。

「はーい。今、行くよ」

二階の自室にいた男は読み掛けの朝刊を持って一階に降りた。男が台所に入ると、朝食の支度が出来ていた。四人掛けのテーブルの上には、二人分の食事が用意されていた。娘たちが使っていた二脚の椅子はテーブルの下に収納されている。「一人の娘が家にいた頃は、男の左横の席には下の娘が、妻の右横の席には上の娘が座って、朝晩の食卓を囲んでいた。」

男はテーブルの左横に新聞を置いた後、「いただきます」と言つて食べ始めた。妻も「いただきます」と言つて食事を始めた。沈黙の時間が流れる。醤油や食塩が入った小瓶を動かす音、箸で料理をつまむ音、食べ物を咀嚼する音、汁物を啜る音がテーブルの上で混ざり合つて、二人の耳に入つていくが知覚されない。

静かな食卓は、夫婦二人きりの生活が始まった五年前から続いている。男が会社を退職してからは、回数が一日二回から三回に増えた。

男が工場に務めていた頃は、妻や二人の娘に仕事の話をしても会話が成立しないことを、男は承知していた。娘二人がまだ家にいた頃、四人で囲む朝と夜の食卓は、賑やかだった。女三人寄れば姦しい。特に、その後の時間を気にする必要がない夕食時は、女三人の会話は、その日の出来事から始まって、食べ物、ファッション、芸能情報へと広がつて、途切れることなく続く。

男はいつも一人蚊帳の外に置かれる。もつとも男がこのような話に全く関心がないことを、女たちは知っている。男の方も、女たちの会話が家の前を往来する車の音のように、左の耳から入つて右の耳から抜けていく雜音でしかない。男は黙つて手酌で晩酌し、食卓に並べられた料理を口に入れられる。

妻が昼に見たワイドショー番組を持ち出すと、娘たちは「分かる、分かる」「そうよ、そうよ」と言つて、妻が提供した話題に、有る事無い事を付け加えて話を盛り上げる。週刊誌の記事のように大げさに伝える昼のワイドショーが、女三人によつて更に増幅され、夜のワイドショー番組として、夕食の食卓で放映される。

ある時、妻がセクシャルハラスメントを持ち出した。ある大手企業の男性上司が部下の女性に性的な言動を繰り返していたという話だが、その話に娘たちが飛びついた。娘たちの勤める会社の男性上

司に対する悪口へと発展していった。

「お父さんの会社でも、セクシヤルハラスメントつてあるの？」

上の娘が突然、男に質問した。

「うちの工場は男ばっかりの職場だ。そんなこと全く関係ないね」と男が答えると、今度は、

「男ばっかりの職場とはいっても、事務職の女性社員だっているでしょう?」と、畳み掛けで質問してきた。

「確かに、うちにも女性社員が何人かはいるけど、お前たちの会社と違つて、座つて仕事をしているオフィスじゃない。立つて仕事をしている工場だ。そんなことができる職場じやないぞ」男は不機嫌な表情を浮かべて答えた。

定年退職後、これといった趣味を持つていなかつた男は、毎日が休日になつた。会社勤めをしていた頃は、家にいる時よりも会社にいる時の方が居心地は良かつた。男にとつて、本来の居場所は「会社」であり、「家」は仮の居場所でしかなかつた。

マズローの欲求五段階説に従えば、家は「生理的欲求」「安全の欲求」「社会的欲求」といった低次の欲求を満たす場であり、会社は「自我的欲求」「自己実現の欲求」といった高次の欲求を満たしてくれる場であつた。

会社に居れば、自分の持つていてる技術や知識といった「見えない」ノウハウが、「見える」製品となつて社会に流通し人々の生活を豊かにしていく。

男が勤務する工場で製造された自動車が通勤途上の道路を走つている光景を目にするとき、男は自分の仕事が社会に役立つてることを実感する。男にとつては四十年余りの会社勤めは人生そのものだつた。

男は東北地方の寒村に生まれた。農家の後継ぎになつた次兄は実家に残り、男は地元の工業高校を卒業した後、関東地方にある自動車会社の製造工場に集団就職した。

男は「団塊の世代」と呼ばれる、戦後生まれの第一次ベビー・ブーム世代だ。男が就職した昭和四十年代の日本経済は高度成長期に入つていた。当時、地方の農村部にいた若者は農業以外に就業の機会が与えられていない地元を離れて、新たな就業先を求めて都会へと流れていつた。

一方、対米輸出の拡大を睨んだ自動車や家電製品などの輸出産業は工場労働者として、若年労働者を求めていた。特に地方にいた若者（男子）は「金の卵」と呼ばれ、なかでも工業高校を出た新卒の

男子は即戦力としての活躍が期待され、どこのメーカーでも引っ張りだこだつた。男が卒業した高校からは数人が同じ工場に就職したが、定年まで勤め上げたのは男一人だけだった。

会社では、従業員の「自我の欲求」や「自己実現の欲求」を巧みに取り込み、会社の業績向上につなげる仕組みが構築されていた。その仕組みとは新卒で入社し定年まで同じ会社に勤める「終身雇用」と勤続年数や年齢などを重視して役職や賃金を決める「年功序列」の人事制度だ。

このほかにも従業員とその家族に対して保険・住宅・教育などへの給付金の支給や社員寮・住宅・保養施設などの提供を行う「福利厚生」も用意されていた。「終身雇用」と「年功序列」で従業員の長期・安定雇用を保障し、「福利厚生」で従業員とその家族の生活を支えるという日本型雇用慣行が高度成長期の日本経済を支えていた。

男が就職した工場は昼間・準夜勤・夜勤の三交代の勤務体制が敷かれ、工場は二十四時間休むことなく稼働していた。長時間、変則的な労働時間だったため、休日に家に居る時は体を休める時間に充てていた。二人の娘が家にいた頃は、たまに家族で外に出掛けたりすることもあつたが、男にとつて我が家は、寝に帰る場所であり、体を休める場所でしかなかった。

妻との出会いは、男が会社の独身寮に入っていた頃に遡る。当時、妻は独身寮の賄いをしていた。郷里が同じということもあつて、男はこの女性と親しくなつて交際し、知り合つてから五年後に結婚した。

男は結婚すると独身寮から世帯用の社宅に移つた。妻は寿退職して専業主婦になつた。二人の子供が生まれ、やがて大きくなるにつれて社宅が手狭になつたことから、勤務先の工場から十キロほど離れた場所に造成された新興住宅団地に車庫付きの一戸建て住宅を入れた。

男が通勤に使う自家用車は、男が勤務する自社工場で製造している小型の大衆車だ。男が独身の頃は、自社工場で製造したスポーツカーを乗り回していたが、結婚して子供ができるからは、大衆車に変更した。男はこの車を運転して勤務先の工場に通勤した。住宅と車の購入資金は、会社が従業員に提供する「福祉厚生」を利用して長期・低利のローンを組んだ。

二人の娘が結婚して家を出てからは、男と妻との会話は二人が顔を合わす食事時に集中している。「会話」というよりは「事務連絡」に近かつた。仕事の話が妻に通じないことを、男は分かつていて、妻の仕事である家事が話題になる。

帰宅時間が遅くなるとか、昼の弁当は要らないとか、出張の予定が入ったとか、妻が毎日回す家事ラインに影響の出そうな情報を、男は妻に手短に伝える。妻からは「はい、分かりました」という返事が返ってきて、そこで会話は終わる。

男が事務連絡を忘れたことで、妻の嫌みが男に返ってくることが度々あつた。そんな時は、男は「すみませんでした。今度から気を付けます」と言つて謝罪する。

言わぬが花。へたに言い訳をすれば、妻から角の立つ言葉が返つてくることを、男は知つている。
一方、妻の方も、趣味や友達付き合いの話をして、仕事の事しか頭にならない夫に同じなことを知つていて、夫にも少しは関係がある家事の話を持ち出す。

明日のごみ出し日に出すごみの事とか、家で洗濯する普段着やクリーニングに出す外出着の事とか、妻の家事ラインに乗せる仕掛かり品について、妻は夫に手短に告げる。男は「分かりました」と返事をして、そこで会話が終了する。

男が入社した当時、工場には常勤雇用の従業員が五百人ほどいたが、その後、製造ラインの自動化によつて人員規模は縮小し、退職を迎えた年には三百人ほどの人員体制だつた。男は副工場長の役職で定年を迎えた。転勤を覚悟すれば工場長の椅子も用意されていてが、転勤になれば単身赴任が避けられないことから、男は昇進の話を断つた。

家事をしたことがない男は、単身赴任先で仕事と家事を両立させることは難しいと考えた。家事の中でも、特に食事の支度は面倒だ。せ外食に頼れば栄養の偏りが生じ、やがては生活習慣病を発症するのではないか、という不安があつた。

男が会社勤めをしていた頃の社会には、「男は会社で仕事、女は家庭で家事と育児」という性別による役割分担が当然という風潮があつたし、当時の会社もそれを是認していた。

近年、盛んに言われている仕事（会社）と生活（家庭・家族）のバランスを重視する「ワーク・ライフ・バランス」というような考え方にはなかつたし、男性が育児や介護のため会社を休む、労働時間を短縮する、などという考えは当時の社会では許容されていなかつ

た。

会社勤めがなくなつた今は、男の居場所は我が家しかない。住み慣れたはずの我が家であるが、他人の家に居るような感じで落ち着かない。

会社を退職して間もなく三か月になるが、この三か月を振り返つてみると単調な一日の繰り返しだ。男は朝飯を食べ終えると一階の居間に入つては新聞を広げて読み始める。

一面から読み始め、政治経済、スポーツ、文化、社会、と紙面の端から端まで目を通す。最後は番組欄をチェックして、今日見る番組にマークで印を付ける。これだけで二時間はかかる。

会社勤めをしていた頃は、忙しくて新聞をゆっくりと読んで暇はなかつた。朝飯を食べながら、新聞紙を広げて一面と政治経済面にさーと目を通して、他は見出しを追う程度だつた。しかし今は違う。男は捨てたいほどに沢山ある時間のやりくりに困つていた。一方、妻の方は、毎日の買物と週に何回かある習い事や友達付き合いで忙しい。日中、家を留守にすることも度々ある。妻が家に居ると男の背中に向かう視線が何かと気になるが、この時ばかりは家でゆつたりと過ごすことができる。

男にとって、今住んでいる場所が我が家であつても「仮の居場所」のままである。一方、「家内」で「嫁」である妻にとつては、今住んでいる場所が我が家であり、最初から「本来の居場所」である。

男にとって、我が家が「生理的欲求」「安全の欲求」「社会的欲求」を満たす場でしかないが、妻にとつては「自我の欲求」や「自己実現欲求」も満たしてくれる場所もある。

家の中では、食事、掃除、洗濯など家事全般と育児を取り仕切つていてる妻の権威は絶大だ。男が朝飯を終えて一階居間のソファーに座つて新聞を読んでいる時、台所で家事をしている妻の視線を背中に感じることがある。

食器を洗う音がいつもよりも大きく聞こえる時や、男が新聞を読んでいるのに掃除機を回す時だ。男が居間で新聞を読んでいると、掃除機が居間に入つて来る時もある。

そんな時、男は自分が「粗大ごみ」なつて、掃除機に吸い込まれてしまうのではないかという不安に駆られることがある。男は読み掛けの新聞を持つて、二階にある自室へと向かう。

二階の自室は上の娘が家に居た頃に使つていた畳部屋であるが、今は男の書斎兼寝室になつていて。この部屋は妻の視線や妻が呟く小言から身を守るシェルター（避難場所）にもなつていて。

男が会社勤めをしている頃は気が付かなかつたが、妻は几帳面で神経質な性格の持ち主だ。男がたつた今使つた居間の明かりやエアコンのスイッチ消し忘れ、男が今しがた使つたトイレと洗面所の電気の消し忘れや汚れが気になるらしい。

一階の台所で、朝飯に使つた食器を洗つてゐる妻の小言が二階の自室に居る男の耳に届くことがあるが、食器を洗う音に邪魔されで小言の中身がよく聞き取れない。

聞き取れなかつた妻の小言が、昼飯を食べている時に男の目の前で再生された。「あなた。朝ご飯の時、ご飯粒やおかずを床にこぼしたでしょう。落ちていたわよ。まるで小さな子供みたいじやないの」と、男は妻に指摘された。

小言に嫌味も加わつて男の心を突き刺す。男は普段、妻の視線を避けようと、下を向いて食事をしてゐる。箸やスプーンで掬つた料理を口に入れた後、気づかないうちに口からこぼれたのかもしれない。几帳面で神経質な妻の性格を熟知している男は、落としたことに気づけば自分で拾う。

言わぬが花。言い訳をすれば、小言や嫌味が倍返しで返つて来る空気を感じ取つた男はうつむいて、「ああ、すみません。今度から気をつけます」と謝罪する。

しかし、妻が作つた料理についてのコメントを求められた時は、受け答えに注意が必要だ。一日三回の静かな食卓で交わされる二人の会話の話題は、そのほとんどが妻から提供され、多くは妻の仕事である「家事」についてだ。妻の話を受けて、男の方は「はい、はい」と頷いたり、「ああ、そうだつたの」と相槌を打つたりと、短い言葉で返す。

しかし、妻が作つた料理についてのコメントを求められた時は、受け答えに注意が必要だ。

「どうかしら、このラザニア。この前、料理教室で習つたのよ」

男が料理を一口食べた後、突然、妻から感想を求められた。

「ええ、ラザニアつて、いま食べた料理のこと?」と聞き返す。

「ラザニア知らないの? イタリア料理よ」

「ああ、そうだつたの。このラザニア、美味しいよ」と男は答えた。

「たつたそれだけ。このラザニアは作るのが大変だつたのよ」

通り一遍の褒め言葉では満足しなかつたのか、妻は不満そうな表情を浮かべて言つた。

「ああ、ごめん。それは大変だつたね。君が作つたラザニアは最高だよ! 本当に美味しいよ!」と少し大げさに褒めてやつても、「いいわね、男の人つて。食べるだけで。それに『美味しい』という言葉

しか知らないの。もっとほかの言い方もあるんじやないのかしら？」と、妻特製の皮肉入りの言葉が返ってきた。

男は昭和時代のラーメンCM「私作る人。僕食べる人」を思い出した。このCMコピーは、男女の役割分業を固定化するとの批判を受け、二か月ほどで放送中止になった。

二人の会話の中で男と妻の口から出る言葉の数を比較すれば、妻の五に対し男は一だ。妻がヒステリーを起こした時は要注意だ。機関銃のように言葉の弾丸が容赦なく男に浴びせられる。その時は、妻の十に対して男は一だ。こうなつたら会話は成立しない。言い訳は無用。「分かった。分かった」、「ごめん、ごめん」といって、男は二階に自室に逃げ込む。

男が工場勤めをしていた頃は、妻がどのようにして終日、家で過ごしているのか、関心もなければ気に掛けることもなかつた。仕事を終えて家に帰れば、風呂や夕飯の支度は出来ていたし、朝起きると朝飯が出来ていた。

男が目を覚ますと、頭の中には今日の予定表が張り出され、体はまだ家にあつても、心の方は一足先に出社していた。「夫は会社で仕事、妻は家庭で家事と育児」という役割分担が、男の家の不文律となつて日々の生活が繰り返されていた。

しかし今は違う。男と妻は、一つ屋根の下で居間に掛けている柱時計が刻む時の流れのなかで、場所と時間を共有している。男が消費する時間のほとんどは自由時間だ。

一方、妻が消費する時間の三分の二は拘束時間で家事に費やされる。男は、家の中で家事をする妻の姿を見ながら、妻の家事労働が男の勤め先だった工場の生産ラインに似ていることに気づいた。

一階にある台所、居間、トイレ、洗面所、風呂場は妻が敷いた家事ラインに組み込まれている。炊事、洗濯、掃除、買い物の順で時間通りに機械的に家事が流れていく。妻は家事ラインが思い通り間通りに動かないといらいらして機嫌が悪くなる。

その原因が男にあると妻が認定した場合は、容赦なく男に冷たい視線を向けて、時には嫌味や愚痴となつて男の自尊心を傷つける。居間で新聞を読んだりテレビを見たり、台所に飲み物を取りに行つたり、トイレに用を足しに行つたりすることに他意はない。普通で自然な家の中での振る舞いがどうして妻の機嫌を損ねるのか、男は理解に苦しんだ。

亭主元氣で留守が良い。男が係長に昇進した年に放映されたテレビコマーシャルがきっかけとなつて広まつた流行語だ。夫は家にお金を入れるだけで良く、普段は家にいない方が妻にとつて都合が良いという意味だ。

会社勤めを終えた男は会社からもらつた退職金を取り崩して、毎月、妻に生活費を渡している。この点は流行語と同じだが、後半の「留守が良い」という点は違う。一日中、家に居る男は妻の目にどのように映つているのだろうか。

妻が持つている残り三分の一は自由時間だ。妻はこの時間を利用して、習い事や友達付き合いの時間に充てている。妻は習い事や友達付き合いで家を留守にする。

女房元氣で留守が良い。男は一階居間のソファアームに寝転がつてゆつたりと過ごすことができる。

妻は同じ習い事をしている友人からランチに誘われて出掛けることがある。午前十一時過ぎになると友人の運転する車が妻を迎えて来る。

妻が友人とランチに出掛ける時は、留守番をする男の昼食の支度もあることから、家事ラインは通常よりも速く回転する。その日が来ると、男は朝飯を食べた後、足早に台所を去つて居間を素通りして二階の自室に向かう。

男が一階の居間にいると、家事ラインが止まつたとか、回転が落ちたとか、妻から疑いの目で見られてはたまらないという心理が男に避難行動を促す。

普段は自分の軽自動車を運転して近くのスーパーに買い物に行く妻であるが、第二、第四金曜日になると、男の車に乗せてもらつて郊外にある大型ショッピングセンターに、ランチを兼ねて出掛ける。近所にあるスーパーや店では買えない商品やサービスを購入するためだ。それと月二回、土曜日になると男の家に遊びに来る二人の孫にあげるお菓子を買う目的もある。

午前十一時過ぎに家を出るため、家事ラインはいつもより早く回転する。朝飯の席で妻が男に言った。

「あなた、今日は買い物に行く日よ。車、お願ひね」

「ああ、分かったよ。例の所ね」男が反射的に答えた。

大型ショッピングセンターに出掛けた時は、男の車が妻の足代わりになる。ショッピングセンターに向かう途中に妻が苦手な道路があるからだ。妻は車線が多く混雑した道路での運転が苦手だ。車線変更が怖いらしい。妻は以前、車線変更に失敗して後続車と接触事

故を起こしたことがある。それがトラウマとなつて複数車線のある道路での運転は避けている。

通常、車線変更をする場合、ドアミラーやバックミラーを見て後続車の動きに注意を払いながら、まずはワインカーを出して後続車に車線変更の合図を送りながら、ハンドルを切るタイミングを探る。妻はワインカーの点滅とハンドル操作の間合いを計るのに相当な神経を使うらしい。家事ラインのように自動制御されていないからだ。

男が妻の足代わりに運転する車は、もちろん自社工場で製造している小型の大衆車だ。午前十一時半過ぎ。男は妻を車に乗せてショッピングセンターに向かつた。いつものことだが妻は後部座席に座つていてる。

男が妻と交際していた頃に乗つていた車は、当時、男が勤務していた工場で製造していたスポーツカーだった。団塊世代の若者、特に男子にとって、車を所有すること 자체が憧れであり、ステータスシンボルであつた。

また、車は女性の心をつかむための強力な道具でもあつた。助手席に彼女を乗せてドライブに出かける。景色の良い場所で車を止め、彼女を口説いてプロポーズというお決まりのパターンだ。男もそれを実践し妻と結婚した。

男の運転する車がショッピングセンターに着くと、時計は正午を回つていた。いつものことだが、ランチを済ませてから買い物をすることになつていてる。ランチを食べる場所を決める権限は妻にある。「あなた、お昼はイタ飯なんかどうかしら」妻が男に提案した。

最初から決まつていてるくせに、と男は思つたが、「イタ飯か。たまにはいいね」と相槌を打つた。

お昼時といふこともあって、レストランの前には行列ができるつた。予約を入れて店先に並べた椅子に腰を掛けて席が空くのを待つた。しばらくして係の女性が男の名字を呼んだ。

自分一人であれば「喫煙席をお願いします」と男は言いたかったが、家の中でも外でも妻と一緒に居る場所では禁煙になつていてる。禁煙席をお願いします」と答えた。

二人は禁煙席に案内された。この店では分煙になつていてるらしく禁煙席と喫煙席がはつきりと分かれている。喫煙席は片隅に追いやら四分の一ほどのスペースだ。喫煙席ではダークスリーブ姿のサラ

二人は禁煙席に案内された。この店では分煙になつていてるらしく禁煙席と喫煙席がはつきりと分かれている。喫煙席は片隅に追いやら四分の一ほどのスペースだ。喫煙席ではダークスリーブ姿のサラ

リーマンが日替わりランチを注文していた。

分煙・禁煙の流れは公共施設だけでなく、民間の施設でも広がっているようだ。特にスーパーやデパート、レストランなど不特定多数の人が集まる場所は分煙や禁煙が進んでいる。

男が時々行く近所のパチンコ店でも、分煙にするか禁煙にするかでもめているようだ。パチンコ利用者の喫煙率を考えれば禁煙はマイナス要因に働くが、一方で非喫煙者を新規顧客に取り込めるという思惑も働く。その点、分煙にすれば喫煙者も非喫煙者も顧客に取り込めるが、そのための設備投資が新たに必要になつてくる。

向かい合わせに座つた二人は、テーブにあるメニュー表をそれぞれ開いた。

「あなた、今日はパスタが美味しそうね。パスタにしない？」

妻が男に提案した。

「ああ、それがいいね」男は反射的に答えた。男には選択権はない。「いつものように、二種類別々に注文すれば、二種類のパスタが楽しめるわ。私はクリーム系のカルボナーラにするわ。あなたはトマト系のペスカトーレはどうかしら？」

「ああ、それでいいよ」男は同じ言葉を繰り返した。

「本当にこれでいいの？珍しく、妻が男に気を使って言つた。
「ノープロブレム」男は言葉を変えて答えた。

パスタ料理のいろはも知らない男にとつては、どうでもいいことだつた。パスタがマカロニやスペゲッティの類を総称したイタリア語であると、男が知つたのは最近のことだ。

男が子供の頃から知つているパスタ料理は、マカロニサラダとミートソースだけだ。

「済みません。カルボナーラとペスカトーレをお願いします。それと取り皿も一緒にお願ひします」

妻は水の入ったコップを持って来た店員に注文を入れた。

「あなた、退職して三ヶ月経つたけど、時間を持て余し気味じやないの？普段のあなたを見ていると、よく分かるのよ」

ランチが出来上がるのを待ちながら妻が言った。

「君にはそういう風に見えるかもしれないが、今は工場勤めの頃に使い過ぎた体と心を休める時間に充てているんだ」

「退職してもう三ヶ月が過ぎたわ。充分、静養できたんじゃないの？」

「体の疲れはなくなつても心の疲労感がまだ抜けていらないんだ」

男は三年前に起きた出来事を思い出した。男が勤めていた工場で

製造され米国に輸出された高級車の電子制御装置に不具合が見つかったとして、会社は米運輸省高速道路交通安全局に大規模なリコールを届け出した。対象車は五十万台余りに上った。

副工場長だった男はその対応に追われた。また、男の直属の部下で電子制御装置の生産ラインの責任者だった担当課長が事後処理に忙殺されて過労死した。この部下は一家の大黒柱となつて妻と三人の子供を養っていた。遺族の心情を察すると、それが痛恨の極みとなつて男の心に刻まれていた。

店員が二人の席にランチを持つて来た。取り皿を使って二種類のパスタ料理を分け、小分けした料理を食べながら、妻が言った。「あなた、燃え尽き症候群って知っている？ 一つの物事に没頭していた人が、突然、燃え尽きたかのように無気力状態に陥る症状のことよ。あなたのよう仕事一筋の人生を送つて来た人が退職した後、することがなくなると起きやすいそよ。趣味やスポーツで体を動かすのもいいんじゃないの？ 二年前に学校を定年退職した隣の藤田さんは、少年野球の指導員をしているわよ」

「燃え尽き症候群か。そう言わればそんな気もするけどね。だからといつて、いきなり趣味を見つける、スポーツを始めろと言われても無理だよ。藤田さんは中学校で体育を教えていた先生だ。学校を退職した後、藤田さんが少年野球の指導員になつたというのも仕事の延長線と考えれば、ごく自然の成り行きじゃないか」

男は不機嫌そうに言った。

「そういえば。あなたと結婚したばかりの頃、プラモデルに夢中だったわね。それも車の模型が多かつたと思うけど」

「プラモデルか。そう言わればそんな時期もあつたね」

男は独身時代からプラモデルに熱中していた。なかでも乗り物のプラモデルが好きだった。男が勤める工場でスポーツカーを製造していたことや、当時、人気を博していく人形劇による特撮テレビ番組の影響もあつた。このテレビ番組は国際救助隊と名乗る秘密組織がスーパーパワーを駆使して絶体絶命の危機に瀕した人々を救助するというストーリーだ。

男は子供が生まれてからもプラモデルを作り続けていたが、社宅が狭くて完成品を陳列する場所の確保が難しくなつたことや、娘のおもちゃにもならないと考え、プラモデルは実家にいる兄に引き取つてもらつた。兄には二人の息子がいる。

「この前の土曜日に雄太が家に来た時に、私が『おじいちゃんは、若い頃、プラモデルに夢中だったのよ。なかでも自動車の模型をた

くさん作っていたわよ』つて話したら、『僕も今、乗り物の模型を集めてるんだ』つて言つていたわよ』

「へー、雄太が乗り物の模型が好きだつたなんて、知らなかつたよ」
結婚して隣町に住む上の娘には二人の子供がいる。一人は小学三年生の雄太、もう一人は幼稚園児の春奈だ。上の娘は月に二回、土曜日に仕事が入ると、二人の孫を実家に預けて出勤し、帰りに引き取りに来る。明日は娘が二人の孫を男の家に預けに来る日だ。

ランチを終えた二人はレストランを出た。
「私の買物は二時半頃には終わると思うので、それまで、いつもの本屋さんで待つてね」と妻が男に言つて、二人は別れた。

ショッピングセンターの店内は広く、一階から三階まで吹き抜けの構造になつていて。細長い広場を挟んで両側に専門店が並んでいい。いつものことだが、男は本屋で立ち読みをしながら、妻が買い物を終えるのを待つていて。

妻は自分の買物、二人の孫たちにあげるお菓子、それと春奈とお菓子作りをするための材料を仕入れる。

雄太が車の模型に興味を持つていてことを妻から知られた男は、本屋に行かないで、おもちゃ売り場に足を運んだ。店に入つて右側の目立つ場所に、片手で握れるくらいのミニカーが陳列されている。乗用車やバス、電車、パトカー、救急車、消防車などの業務用車両が並べられている。車両の数も種類も豊富だ。男は、ミニカーの集団の中から赤いスポーツカーを見つけた。

「これは、昔、うちの工場で作つていたスポーツカーだ！」

男はスポーツカーを手に取つてじつと眺めた。男が就職した頃に自社工場で作つていたスポーツカーだ。このスポーツカーは当時、若者の人気を博した車種だった。男は会社の低利ローンを使って赤いスポーツカーを購入した。

次に、男はプラモデルを探したがなかなか見つからない。やつと見つけたプラモデルは奥まつた場所に陳列されていた。陳列されているプラモデルの多くはロボット物が中心で、乗り物の方は数も種類も少ない。男は赤いミニカーを手に持つてレジに並んだ。

第二土曜日の朝。男は一階の居間で新聞を広げて読んでいる。妻は台所で食器を洗つていて。玄関前に一台の車が止まつた。どうやら上の娘が孫たちを預けに来たようだ。ガラー、と玄関の引き戸を開ける音がした後、

「おはようございます！」と孫たちの甲高い声が家中に響いた。

「雄太、春奈、おはよう！」妻が玄関に出て二人の孫を出迎えた。

「おはよう、お母さん。雄太と春奈をお願いね」

上の娘が妻に言つた。

「分かつたわよ。気を付けて行ってらっしゃい！」

二人の孫を預かつた妻が娘を送り出した。

「おばあちゃんは、台所の後片付けがまだ残っているから、終わるまで、おじいちゃんの居る部屋で待つてね」

「はーい」

妻は台所に戻り、二人の孫は居間に入った。

「おじいちゃん、おはよう！」

雄太と春奈が居間で新聞を読んでいる男に挨拶をした。

「おはよう、雄太に春奈。二人とも朝ご飯は食べたのか？」

「男が二人の孫に尋ねた。」

「食べたよ。おじいちゃんは食べたの？」雄太が男に聞いた。

「今、食べたところだよ。これから子供向けの番組が始まるぞ」と、男は部屋の柱時計が間もなく八時半を告げるのを確認して、テレビのリモコンスイッチを入れた。学校の完全週休二日制が実施されからには、土曜日の午前中に子供向けのテレビ番組が放映される。最初は機関車をキャラクターにしたアニメーションドラマだ。雄太と春奈は男の家に来るとき子供向けの番組を見て過ごす。しばらくして台所の後片付けと洗濯を終えた妻が居間にやつてきた。孫たちが家に来る日は、一階に敷かれた家事ラインは炊事と洗濯だけになる。

妻は昨日、ショッピングセンターで買って来た菓子袋を開けて、袋の中から小袋を取り出して二人に配つた。小袋を受け取つた春奈が、

「おばあちゃん、このお菓子、この前テレビで見たよ。私、前からこのお菓子を食べたかったの」と、妻に向かつて言つた。
「そうなの、よかつたわ。食べてごらん」妻が春奈に言つた。

菓子袋のパッケージには人気キャラクターが印刷されていた。また、小袋の中にも同じキャラクターの形をしたクッキーが入つていた。二人はテレビを見ながら食べ始めた。

男も昨日、ショッピングセンターで買ったミニカーの箱を二階から持ってきて、箱から赤いスポーツカーを取り出した。

「雄太は乗り物の模型を集めているんだって。おばちゃんから聞いたぞ。これは、おじいちゃんが若い頃に、工場で作っていたスポーツカーの模型だよ。雄太にあげるよ」「もらつていいの。ありがとう。このスポーツカー、おじいちゃんが作っていたの。すごいな！」

「そうだよ。おじいちゃんが作ったスポーツカーにおばあちゃんを乗せてドライブに出掛けたものだよ」と男が言うと、「思い出したわ。この赤い車、あなたと付き合っていた頃に乗つていた車じゃないの？」妻が合いの手を入れた。

「それつて、デートつて言葉を知つているの。おませな子だね」

「春奈はデートつて言葉を知つて言つた。

「雄太、完成品の乗り物を集めのもいいが、作る方がもつと楽しいぞ。おじいちゃんが若い頃は、プラモデルといつて、プラスチックの部品を組み立てて乗り物を作つたんだ」

「僕でも作れるかな？」

「大丈夫だよ。おじいちゃんが一から教えてあげるよ。今度、家に

來た時に、おじいちゃんと一緒に乗り物を作ろう」

「ほんとに？ 楽しみだな。おじいちゃん、約束だよ」

「おじいちゃん、私のはないの？」

妻の隣に座つて二人の会話を聞いていた春奈が男に向かつて言つた。

「そうそう、春奈にもプレゼントがあるんだ」

男はまた二階に上がつて人形模型の入つた箱を持つてきて春奈に渡した。

「わーい！ これ前から欲しかつたの！」

男が春奈に渡した模型は人気キャラクターのファイギュアだ。昨日、雄太のミニカーを買った後、春奈にも同じように模型をあげないと不公平になると考えた男は、いつたん出たおもちゃ売り場に戻つて買つたものだつた。

時計の針が午前十一時を回つた。

「今日のお昼はピザにしようか。春奈、手伝つてくれる？」

妻が言つた。

「おばあちゃん、ピザを作れるの？」

「もちろんよ。この前、料理教室で習つたのよ」

「お家でも、お母さんが時々、ピザを作つてくれるよ。春奈も手伝う！」

「じゃ、一緒に作ろうか！」

「うん！」

「妻が冷蔵庫を開けて材料を取り出した。

「ああ、しまつた。ミニトマトを買うのを忘れていたわ。あなたお願ひ。ミニトマトを買ってきて」

買い物を頼まれた男は自転車を漕いで近くのスーパーに向かつた。スーパーに行く途中で、ホームセンターの店先に並んだミニトマトのプランターを見つけた。赤い実が幾つか付いている。

ミニトマトってプランターでも作れるのか。家でも作つてみるか。簡単そうだし。それにいつでも食べられる、と男は思った。

午後になつて、妻は春奈と台所でお菓子作りを始めた。今日はチーズケーキを作るらしい。二人はパイ生地作りから始めた。

男と雄太は二階にある男の部屋でアルバムを広げて写真を眺めている。男が勤めていた工場で製造していた車の写真集だ。完成車両だけではなく組み立て中の写真もある。

生産ラインに立つた作業服姿の数人の男たちが、車の周りを取り囲んで作業をしている。雄太は、手にスパナを持つた作業服姿の男

を指差して言った。

「この人つて、もしかしておじいちゃん？」

「そうだよ。おじいちゃんがまだ二十代の頃の写真だ」

「この時、工場ではどんな車を作つていたの？」

「さつき、雄太にあげた赤いスポーツカーだよ」

男が工場に就職した頃に生産していた車種はスポーツカーを中心だつた。その後、大衆車にシフトし、現在は主に高級車を生産している。男が勤めた工場では、団塊世代のニーズに合わせるように生産する車種を変えていった。男もスポーツカー、大衆車と買い替えていつたが、所有している車は大衆車のままだ。

「おじいちゃん。今でもこうやつて車を作つているんだ」

車が完成するまでの生産ラインの写真を見ながら、雄太が言つた。「おじいちゃんが工場に入った頃は、何人かでチームを編成して、車を組み立てていたが、今はロボットが組み立てているんだ」

「人間じゃなくてロボットが車を作つているの？」

「ほら、この写真を見てごらん。人間の腕のような形をしたアームが車体のボディーに鉛を打ち込んでいる写真だ」

「ほんとうだ！」雄太の目が輝いた。

「全部の工程じゃないけど、鉛を打ち込むとか、ねじを巻くとか、塗装といった単純な作業は人間よりも機械の方が速く正確に行うことができるので、ロボットに任せているのさ。人間はロボットが正しく動くように制御しているんだ」

「後姿しか見えないけれど、この人つて、おじいちゃん？」

「そうだよ。制御盤のメーター見ながら、ロボットが正常に動いているかどうかを確認しているんだ」

「すごい！こんな風にして、大勢の人やロボットが作業を分担して車が出来上がるんだね」「そうだとも。一台の車を完成させるまで、時間と手間が掛かるけど、その分、完成した時の喜びは大きいぞ！」

「車を作るって楽しそうだね」「そうだとも雄太。今度、おじいちゃんの家に来たら、一緒に乗り物を作ろうか。楽しいぞ！」

「うん、分かった。ところで、おじちゃん。どうやって車を作るの？」
「本物の車みたいに鉄板を切つて作るわけにはいかないので、紙を切つて乗り物を作るんだ。出来上がった乗り物のボディーに、絵の具を使って好きな模様や色を塗ることができるぞ」「わーい！おじいちゃん楽しみにしているよ！」

雄太は満面に笑みを浮かべた。

男が捨てたいほどに沢山ある時間、妻にあげたいほどに余分にある時間が、ようやく埋まつた。雄太と一緒に工作をして楽しむ時間や、妻が春奈と作る昼ご飯の食材の一つとして、ミニトマトを栽培する時間に充てることにした。

男にとって「仮の居場所」でしかなかつた「我が家」が、「本来の居場所」へと変わってきた。男にとって「生理的欲求」「安全の欲求」「社会的欲求」を満たす場でしかなかつた「我が家」が、「自我の欲求」や「自己実現欲求」も満たしてくれそうな場所に変わってきた。

男はまず、ミニトマトの栽培から始めた。玄関前の一角落にプランターを置いて、そのプランターにミニトマトの苗を植えることにした。男の家は南向きに建っているため、玄関前は日当たりが良好な場所だ。
男は近くのホームセンターでプランターニ二鉢とミニトマトの苗四本を買って来た。そのほかにプランターに入れる土や肥料、スコップやじょうろなど家庭菜園に必要な道具も買い揃えた。男は、早速、歩道と接した玄関前の空いたスペースにプランターを置いて、土を入れミニトマトの苗を植えた。ミニトマトの栽培管理が男の日課になつた。

次は、孫の雄太と乗り物の工作をするための下準備を始めた。男は、車の生産現場で鍛え上げた腕を使って、世界で一つしかないオリジナルな乗り物を作つてやろうと考えた。加工する材料は鉄ではなくて紙だ。紙であれば子供でも簡単に加

工ができるし怪我の心配もない。

男は雄太が家に来る次の土曜日までに、材料を調達し試作品を作つておくことにした。雄太に試作品を見せながら一緒に同じ物を作する、という段取りをつけた。以来、雄太が家に来る日まで、乗り物の試作品を作つておくことが男の日課となつた。

工作に使う材料は、できるだけ家にある不用品やごみとして出すものから調達することにした。乗り物のボディーにする部分は厚めの紙が良い。家にある菓子折り箱や化粧箱、段ボール箱を集めては自室の押し入れにストックしておくことにした。

また色の付いた紙や模様の施された包装紙も何かに使える。ペットボトルなどのプラスチック性の容器も使えるかも知れない。捨てればゴミ、生かせば資源。男は家中にある不用品の収集を始めた。二階にある男の自室は工房兼ストックヤードになつた。

「あなた。そのごみ、どうするの？」

男が台所の一角落いてある紙袋から折り畳まれた化粧箱を抜き取ろうとしていたら、妻に見つかった。

「雄太と工作をする材料に使いたいんだ」男が答えた。

「そんなのが、工作の材料になるの？」

「白くて厚めのこの紙は、工作中最適だよ」

「明日のごみ出し日に合わせて取つて置いて置いたものよ。持つて行つてもいいけど。散らかさないでよ」

男は抜き取った化粧箱を持って、足早に自室に逃げ込んだ。

「ゼリーの入つたこの容器、もらつていいかな？」

「朝飯を食べていた男が顔を上げて妻に言った。

「何するの？これも工作の材料に使うの？」妻が怪訝な顔で言った。

「この容器を使えば紙で作れないパッツを作れるんだ。大丈夫、散らかさないから。それと、そこにあるラップの芯も、もらえる？」

男は使用済みのラップフィルムの芯を見つけて言った。

「いいけど。ちらかさないでよ」妻が不機嫌そうな顔つきで言った。

妻の几帳面な性格はごみの出し方にも表れている。男の住む町ではごみは九種類に分別収集されている。「燃やすごみ」は有料化されている。一方、無料の「資源ごみ」の方は六つに分別してゴミステーションに出さなければならぬ。

妻は資源ごみの分別には特に気を使っている。先日も、プラスチック性の食品容器を洗わないで出している家があるとか、古新聞と

一緒に出すことになつてゐる段ボールを別の日に出していたとか、食事をしている時に、妻が男にぼやいたことがあつた。

「昨日、プラスチック容器の収集日だつたけど、また、洗わないで、ゴミステーションに出している家があつたわ。きっと辻本さんよ。カツプ麺の食べ残しが入つていたらしく、カラスが袋を突つついで食べていたわよ。袋からはみ出たごみが辺りに散らかつていて大変だつたわ。あなた、今度、辻本さんに会つたら注意してよ」妻が男に向かつて言つた。今月、男の家がごみステーションの管理當番になつてゐる。

「どうして辻本さんが出したごみだつて分かるんだね。出した人の名前がごみ袋に書いてあるわけでもないし……」

「一人暮らしの辻本さんが家で食事を作つてゐるようには思えないわ。この前、カツプ麺がたくさん入つた買い物袋を持つて家に入るのを見たのよ」

「仮に辻本さんが容器を洗わないで出していたとしても、出していく現場を押さえないとダメだよ。今度、見つけたら注意しておくよ」「そうだわ。今度からプラスチック容器の回収日には、家のごみはあなたから出してもらうわ。辻本さんがルール違反をしている現場を押さえられるかも知れないわ」

「分かりました」男は不承不承、引き受けた。余計なことを言わなければよかつたと、男は後悔した。

家の中、特に一階で発生するごみを分別する権限は妻にある。その妻の権限を侵すかのように、家中で資源ごみをせつせと集めている男は、「ミニマリスト」を自認する妻の冷ややかな視線を背中を感じることがある。

持ち物ができるだけ減らし、必要最小限の物だけで暮らす生活にこだわる妻は、突然始まつた夫の蒐集癖には辟易しているのではないかと、男は思つた。妻の家事ラインが敷かれている一階には余計な物や余分な物は一切ない。見つかれば直ぐに妻の手によつてごみとして家の外に排出されてしまうからだ。

「燃やすごみ」に分別されるか「資源ごみ」に分別されるかで、ごみの運命は大きく変わる。人間の生活に「有用な物」として生産され供給された製品が、消費された後は「不用なごみ」に変わる。「燃やすごみ」に分別されると、焼却場で燃やされて灰になつて人生を終える。一方、「資源ごみ」の方は回収され再利用されることに、よつて第二の人生が始まる。

高度経済成長と消費人口の増加が大量生産、大量消費、大量廃棄をもたらした。大量廃棄が環境に負荷を与えていたとの反省から、近年、資源のリサイクルが進んでいる。

容器包装、家電、自動車、建設廃材はリサイクルが義務付けられている。古新聞は再生紙や段ボールに再生される。ペットボトルはペット状に碎かれて化学繊維に生まれ変わる。

男が家中で集めている「資源ごみ」は、孫の雄太と作る乗り物に生まれ変わるために材料だ。また、回収した「資源ごみ」は家事ラインが敷かれていらない男の自室に保管されている。この場所はミニマリストの権限が及ばない場所だ。それとも、ミニマリストが向ける矛先は男が自室にストックしている「資源ごみ」ではなく「男自身」なのだろうか？

妻から見て、「男の体」は「資源ごみ」なのか「燃やすごみ」なのか？男の脳裏に「熟年離婚」という言葉が浮かんだ。長年連れ添つてきただ妻から、ある日突然、三行半を突き付けられるのではないかと、男は疑心暗鬼になつた。

退職後、「会社」との接点がなくなつた男は、「社会」との接点を断ち切らないようにと、小型のテレビとパソコンを自室に入れた。もちろん、パソコンはインターネット回線で「社会」と繋がつていい。一方通行のテレビと違つて、双方向での情報交換ができるパソコンは何かと便利だ。

男は食事の時間以外は二階の自室に籠つて、孫の雄太と工作する乗り物の試作品作りに没頭した。男の器用な手さばきで机の上に広げた化粧箱がカッターで切りとられ、乗り物のパーツが次から次と出来上がる。

男が時折、疲れた首を持ち上げると、写真立てに入つた一枚の写真と向き合う。色あせた写真には、台座に据えられた神輿の前に立つている法被姿の三人の子供が写つていて。男と二人の兄だ。真ん中に立つているのが長兄の勇一、右側には次兄の健二、左側には男真だ。

「兎追いしかの山 小鮒釣りしかの川 夢は今もめぐりて忘れがたき 故郷……」
男は童謡「ふるさと」を口ずさんだ。脳裏に子供の頃に過ごした郷里の情景が蘇つた。

「兎追いしかの山 小鮒釣りしかの川 夢は今もめぐりて忘れがたき 故郷……」
男は童謡「ふるさと」を口ずさんだ。脳裏に子供の頃に過ごした郷里の情景が蘇つた。

背後に見える山並み。男が子供の頃に過ごした故郷には四季折々の色と匂いと音があった。

春の緑色、夏の青色、秋の黄金色、冬の白と黒。

春は青葉の匂い、夏は草の匂い、秋は稻わらの匂い、冬は鼻を刺す冷たい空気の匂い。

ド、ド、ド、ダ、ダ、ダ 春はたんぽを耕す耕運機の音。

ジー、ジー、ジー 夏は蟬の声。

ザク、ザク、ザク 秋は鎌で稻穂を刈り取る音。

ヒュー、ヒュー、ヒュー 冬は北風の音。

男は東北地方の寒村にある農家に生まれた。戦時には小作農家だった男の実家は、終戦後、GHQの指令で行われた農地改革によって、小作地の払い下げを受けて自作農家となつた。この農地改革は、GHQが行った日本の民主化政策の一つで、地主制度の解体を目的に、大地主と小作人との経済的な支配従属の関係を解消させるために行われた。

また、政府は終戦直後の食糧不足を克服するため、「食料増産・自給政策」を推進した。自作農家の米作りを奨励する目的で、政府から打ち出された食糧管理制度に守られて、男の実家では農地改革で払い下げられた二町歩の自作地を少しずつ増やして三町歩ほどに広げた。

男が子供の頃の農業は機械化が始まつたばかりで、人力がまだ主流の農作業は多くの人手と手間のかかる重労働だった。当時の米農家が抱えていた慢性的な労働力不足を補つたのが子供だ。食べる物に困らない農家には子供が自然と多くなる。男には自分を含めて五人の兄弟姉妹がいた。二人の兄、それと姉と妹だ。

田んぼ仕事は雪消え間もなく行われる「田起こし」から始まる。田起こしは雪の重みで硬く締まつた田んぼの土を掘り起こし碎いて柔らかくする作業だ。次に田んぼに水を引き入れ、更に細かく土を碎いて柔らかくし、最後に平らにならす「代掻き」が行われる。「田起こし」と「代掻き」は耕運機を使つて行われた。

耕運機がまだ普及していなかつた頃は馬に鋤を引かせていたようだ。確かに残つている幼少期の記憶を辿ると農作業場の隣に厩があつた。微かに残つてゐる幼少期の記憶を辿ると農作業場の隣に厩があつた。馬作りは種蒔きから始まる。発芽させた種類を苗代田に蒔いて苗を育てる。程よく伸びた苗を抜き取り田んぼに植える「田植え」が始まつた。

田植えは五月下旬頃から始まる。まだ小学校に入つたばかりの男は学校から帰ると、家の裏手にある苗代田に向かう。

苗代田では祖父母がビニールの堆肥袋に穀殻を詰めて作った腰掛けに座つて、程よく伸びた苗を両手で丁寧に抜き取つている。抜き取つた数十本の苗の束を根元で揃えて稻わらで結束する。

男はその苗の束を集め麻袋に入れる。次兄の健二が麻袋に入った苗を自転車の荷台に積んで、近くの田んぼで田植えをしている父母と長兄の勇一のもとに運ぶ。

近くの田んぼで田植えをしている父母と長兄の勇一のもとに運ぶ。

健二は田んぼに着くと自転車の荷台から麻袋を降ろして、代わりに空になつた麻袋を持つて苗代田に戻る。

田んぼで田植えをしている父と勇一は、健二が苗代田から持つて来た麻袋から苗の束を取り出して、腰に巻いた苗籠に苗を入れて補充する。三人は膝や腰を曲げた低い姿勢を取りながら、筒状の田植え定規で引かれた升目の交点に苗を差し込んでいく。

五十メートルほどある畦と畦の間を、上体を折り曲げながら泥濘に足を取られながら苗を植えていく。時々、上体を起こしては硬くなつた腰や背中の筋肉を伸ばす。勇一も苗籠を腰につけて苗を植えていくが、大人のスピードにはついていけない。農家にとって田植えは重労働だった。

夏場は田んぼの草取りに追われる。お盆過ぎ頃から稻の開花が始まり結実期を迎える。九月に入ると黄金色に色づいた田んぼには、ずつしりと重たくなつた稻穂が頭を垂れながら、風になびいている。間もなく「稻刈り」が始まる。

学校から帰つた二人の兄は自転車に乗つて田んぼに向かう。勇一の自転車の荷台に乗せてもらつて田んぼに向かう。田んぼでは父や祖父母が鎌で黄金色に実つた稻を刈り取つている。身を屈めた低い姿勢で稻を刈り取り、上体を起こして刈り取つた数株の稻を稻わらで結束する。この時、硬くなつた腰や背中の筋肉を伸ばす。鎌で刈り取つた稻は稻架木に掛けて天日干しにする。男は二人の兄と一緒に稻の束を一輪車で運んでは稻架木に掛ける。農家にとって稻刈りも重労働だった。

乾燥させた稻穂から穂をはずす「脱穀」、穂から穂殻を除いて玄米にする「糲摺り」を経て出荷用の玄米が出来上がる。玄米は六十キロ入りの麻袋に詰められて農協に出荷される。田起こしから始まつた一連の農作業は、袋詰めした玄米を出荷した段階で終わる。

米の収穫が終わると秋祭りが行われる。秋祭りは春から始まつた

農耕を助け稻田を守ってくれた田の神に収穫を感謝する祭りだ。

男の実家が氏子になつてゐる八幡神社の秋祭りは二日かけて行われる。普段は神社に鎮座する御神体（氏神）が神輿に移されて、その神輿が村中を巡行する。

初日は御神体を神輿に移す「宮出し」が行われ、二日目は巡行を終えた神輿から御神体を神社に戻す「宮入り」が行われる。中学生の勇一は大人の神輿を担ぎ、小学生の男と次兄の健二は子供の神輿を担いだ。

祭り二日目。昨日に続く穏やかな秋晴れのなか、神社の境内には男衆の担ぐ神輿、女衆が担ぐ神輿、それに子供たちが担ぐ神輿が台座に据えられ並んでいる。一升瓶に入った日本酒が白い猪口に注がれ、神輿の担ぎ手に振る舞われた。男衆のなかには顔を赤らめた若者もいる。

祭り用の白装束を身にまとつた男と長兄の勇一、次兄の健二が神輿の前で待機している。観衆のなかに姉の佳子と妹の裕美の姿もあつた。

「お兄ちゃんたち、かつこいいわよ！」裕美が声を掛けた。勇一たち三兄弟が、妹の声援に手を上げて応えた。

神輿が出発する前に、神楽舞の一一行が神社にやつて来て獅子舞と剣舞を披露した。獅子頭に頭を食まれ泣き出した幼子もいた。

「よし、出発だ！」

神楽舞が終わつたのを確認した先導役が号令を掛けた。担ぎ手の肩に載せられた神輿がゆっくりと参道を通り、山門をくぐつて通りに出た。

エイサ、エイサ、エイサ
エイサ、エイサ、エイサ
エイサ、エイサ、エイサ

役場前の広場に集まつた大勢の観衆を前にして、男衆の神輿が押し合ひを演じた。広場には佳子と裕美が先回りをして、男たちの神輿が来るのを待つていた。

エイサ、エイサ、エイサ
エイサ、エイサ、エイサ
エイサ、エイサ、エイサ

熱くなつた男衆の体から湯気が上がる。押し合ひを終えた男衆の神輿は、一路、神社に向かつた。

御神体を乗せた男衆の神輿が巡行を終えて神社に戻つて來た。境内には佳子と裕美の姿もあつた。これから秋祭りのクライマックスシーンが始まる。巡行を終えて帰つてきた神輿から御神体を神社に

戻す「宮入り」が行われる。神輿が神社の境内に入るや、神輿の帰りを待つていた男衆と女衆はスクランムを組み、御神体に悪霊が紛れ込まないようとに結界を作つた。

エイサ、エイサ、エイサ

掛け声を上げて男衆と女衆は押し合つた。御神体の宮入りが終了したことを見示す神樂の奉納舞が行われ祭りは終わった。

男は写真に納まつていいる子供の頃の自分と、洗面所で毎朝、見るのは自分とを見比べて、五十年も経つとこんなにも顔形が変わつてしまふのかと思った。薄くなつた頭髪、広くなつた額に引かれた四本の横皺、垂れ下がた目尻、削げ落ちた頬、張りと艶をなくした肌。

男の顔には六十年の人生が刻まれている。次兄の健二の顔にも六十二年の人生が刻み込まれていて。しかし長兄の勇一の顔には十四年の人生しか刻まれていない。

不思議だ。写真に写つてゐる子供の頃の自分と次兄の顔は色あせてしまつたが、長兄の顔は退色することもなく、今もつやつやとした肌と輝きを保つてゐる。

男の視線は五十年前の郷里に向かつた。お盆が終わつて夏休みも残りわずかとなつたある日。朝から夏の強い日差しが地面を照り付けていた。

家の中の風通しを良くしようと縁側の戸を開け放しにするが、部屋の中に貯まつた蒸し暑い空気は外に出て行かない。

ジー、ジー、ジー、とアブラゼミの鳴き声が蒸し暑さを余計に感じさせる。

カラーン、カラーン、カラーン、と鉦を鳴らす音が遠くから聞こえてきた。徐々に大きくなってきた鉦の音がアブラゼミの鳴き声を打ち消し、家の中に涼感を運んできた。

「じいちゃん！あの鉦の音。もしかして、氷菓子を売りに来たんじゃない？」

茶の間でテレビを付けながら、うたた寝をしていた男が祖父に言った。

「お前たち、好きなものを買つてきな」

祖父は財布から取り出した小銭を勇一に渡した。勇一、健二、男の三人は玄関前の道路に出て、氷菓子を売りに来た麦わら帽子のおじさんを待つた。

カラーン、カラーン、カラーン
発泡スチロール製のクーラーボックスタケを荷台に積んで、自転車を

引く麦わら帽子のおじさんの姿が三人の視界に入った。自転車が家の前で止まつた。

おじさんがクリーラーボックスの蓋を開けると、棒の付いた箱型のアイス、チューブやボールの形になつたアイスなど、色も形も様々な氷菓子が入つていた。

男と健二がチューブ型とボール型の氷菓子をそれぞれ選んだ。勇一は棒の付いた箱型のアイスを二本選んだ。一本は祖父の分だ。勇一が代金を払うと、三人は家に入つて火照つた体を氷菓子で冷ました。

「午後はもっと暑くなりそうだ。家に居ても暑いから、生駒川に行つて魚捕りでもしないか」「勇一が二人の弟を誘つた。

「魚捕り？何が捕れるの？」「健二が勇一に尋ねた。

「ウグイだ。いっぱい泳いでいるぞ！」「勇一が答えた。

「お前たち。魚捕りもいいが、事故には気を付けるんだぞ」

「祖父が心配そうに言つた。

「大丈夫だよ。もう何回も行つている場所だから慣れているよ」

勇一が言つた。

男が子供の頃には、まだ学校にプールはなかつた。同じ学校に通う子供たちは、夏休みになると、水がきれいな生駒川に出掛けて行つては水遊びや魚捕りをして遊んだ。

午後に入ると一段と暑さが増した。三人は自転車に乗つて家を出た。健二は自分の自転車を漕いで、男は勇一の自転車の荷台に乗せてもらい、生駒川に向かつた。

三人が生駒川に着くと、他に子供の姿はなかつた。夏休みの宿題に追われているのだろうか。お盆前に来た時は大勢の子供たちが水遊びや魚捕りをしていたのだが、今日は三人の他に誰もない。蝉の鳴き声が周囲の山肌に当たつて木霊している。川面を涼風が渡る。三人はサンダルを脱いで素足を川の中に入れた。川の水が火照つた体を冷まし、汗を止めた。

川岸から水面を覗くとウグイが群れをなして泳いでいる。水中眼鏡とシユノーケルを付けた勇一は、手にヤスを持って下流の方に向かつた。男と健二は浅瀬で、たも網を持つてウグイの群れを追つた。男が濡れた岩に足を滑らせて川に転落した。淵に落ちた男の体が流れていった。

「兄ちゃん、助けて！」

二人は向こう岸に行くために、川面から顔を出した岩を渡つた。

「わー！」どぼーん、と川面を叩く音がした。

男が濡れた岩に足を滑らせて川に転落した。淵に落ちた男の体が流れていった。

男の悲鳴と助けを求める声を聞いた健二であつたが、急な流れに身を捕られた男の体を捉えることができなかつた。

「雄一兄ちゃん、助けて！徹が川に落ちてそつちに流れしていくよ！」

健二が大声を上げて勇一に助け求めた。男の体が流れ下る先で川に潜つて魚を捕つていた勇一が、水中から体を出して、流れてきた男の体をやつとの思いで掘んだ。男の体を掘んだ勇一は川岸で待機していた健二に徹の体を預けたが、今度は勇一の体が急流に押し流され、やがて川面から姿を消した。

勇一兄さん、ほんとうにすまなかつたね。勇一の命と引き換えでもらつた男の命。男は自責の念に駆られながら人生を送ってきた。

会社勤めを終えた男が妻と囲む一日三回の静かな食卓。そんな事を気にすることなく、男は黙つて食事をするが、妻の方は耐えられないのか、突然、今朝の新聞に載つていた政治や経済の話を出していく。

男も読んで知つてることなので共通の話題にはなるが、所詮は他所事、伝聞情報。話は長くは続かない。しかし、二人が暮らす町で起きた出来事は別だ。関心もあれば関係も出て来るかも知れない。

「あなた、この前、回覧板で回つてきた交番の防犯チラシを見た？」

「町内会の会報は見たけど、防犯チラシは見なかつたね」

「最近、町内で自動販売機荒らしがあつたつて、チラシに書いてあつたわ。チラシを見て思い出したんだけど、もしかして富田さんのお店の自販機じやないかしら、この前、買い物に行つたら、奥さんが『知らないうちに、店の前の自販機から現金が抜き取られた』って言つてわ」

「ええ、富田さんのお店の自販機がやられたつて！知らなかつたな。現金が抜き取られたと言うけど、自販機を壊せば音が出るだろうし、音が出れば富田さんや近所の人が分かるんじやないのかな？」

富田さんは、近所で小さなスーパーを経営している。自宅は店舗の隣にある。

「それが不思議なのよ。自販機は全く壊されていなかつたんですね！朝、いつものように自販機から現金を回収しようとドアを開けたら、なかにあるはずの現金がすっかり無くなつていたそよう」「不思議だね。夜間の静かな住宅街でバールやハンマーなどを使って自販機を壊せば、大きな音が出て、周辺に住む人たちに気づかれてしまう。どうやつて犯人は自販機を壊さずに、現金だけを抜き取つたんだろうね」

「それと、もう一つ不思議なことがあるのよ。富田さんの店の前に自販機が二台設置してあるんだけど、やられたのは飲み物の自販機だけで、アイスクリームの方は現金が入ったままだつたそうよ。でも自販機の前にお守りが落ちていたんですつて」

「お守り？犯人の遺留品かな？」

「八幡神社の学業成就のお守りだつたそようよ」

「八幡神社？」

男は、実家の氏神社も八幡神社だつたことを思い出した。

「どうかしたの？」

「いや、何でもない。そういうえば、自販機荒らしの最新の手口を紹介した特報番組を思い出したよ」

「私、その番組を見ていいけど……」

男は話を続けた。

「この前テレビで見た特報番組で自販機荒らしの手口を紹介してたよ。昔は、夜間になると無人になる工場や倉庫、それに工事現場などにある自販機が狙われる事が多かつたそうだ。バーカーやハンマーを使って、なかには工事現場に置いてある、キーの付いた重機を使つて、自販機を壊して現金を抜き取つていたそうだ。しかし、人がいなくなる前に、自販機から現金を回収して、電源を切つてしまふことで、被害に遭わなくなつたんだ。それに加えてパトカーの見回りが増えたことで少なくなつたそうだ」

「じゃ、犯人はどうやつて、音も立てずに富田さんの店の自販機から現金を抜き取つたのかしら？」

「番組では自販機に物理的な力を加えずに現金を抜き取る手口が紹介されていたよ。自販機内部の回路をショートさせる方法だ。ニクロム線に繋いだ十円玉をコインの投入口に入れて、十円玉が入りきつたら、ニクロム線に串三電池で電流を流すんだ。そうすると自販機内部の回路がショートし、なかのコインが全て出て来るという仕掛けだ。しかし、こちらの手口も最新式の自販機には通用しないそうだ。富田さんのお店の自販機が最新式のものかどうかは知らないけど、最近の自販機には必ず防犯カメラが設置されているので、カメラに記録されている映像を分析すれば自販機の前で不審な動きをした人物は特定されるよ」

「富田さんの自販機が最新式のものかどうかは、私も知らないけど、盗まれたのは硬貨だけじゃないわ。紙幣も盗まれたのよ」

「そうか。紙幣も盗まれたのか。もしかして、インターネットを使つて自販機を誤作動させる手口だつたのだろうか？」

「インターネットを使って機械を誤作動させるつて、どういうこと？」

「最新型の自販機の中には、インターネットを介して、外部の情報機器とデータのやり取りができる集積回路を内蔵している機種があるらしいんだ。例えば、自販機内の飲み物の在庫情報がインターネット経由で、リアルタイムに販売会社に伝えられ、在庫が不足すれば補充される。一方、販売会社からは季節に合わせた飲み物の温度設定の指示が、インターネット経由で自販機に伝えられる。これまで人間が行っていた監視を機械が代行できるようになつたんだ。自販機の飲み物の補充は、まだ人間の手で行われているけど、いざれ機械が代行する時代が来るかもしれない。また、集積回路を内蔵した自販機は販売管理にも役立っている。何時、どんな飲み物が売れたのかも分かるので、売れ筋の飲み物を、一番多く売れる時期に投入することで、自販機を効率よく稼働させることができる。このように、コンピューター以外の多種多様なモノがインターネットに接続され、相互に情報をやり取りすることを I.O.T（アイ・オー・ティ）といふんだ。話を元に戻すと、富田さんの自販機荒らしは、インターネット端末を使って自販機の集積回路にドアを開けるように指示を出して、現金を抜き取つたのかもしれないね」

「そんなこと、本当にできるのかしら？」

「富田さんの自販機がこの手口でやられたのかどうかは分からぬけど、不可能なことじやないよ。I.O.Tは家電製品だけでなく、自動車にも導入されているんだ」

「車がインターネットで繋がっているってどういうこと？」

「うちの会社、いや、務めていた会社でも、今、I.O.Tを搭載した試作車を作つていい段階だ。車に搭載されたセンサーや道路に設置されたカメラなどをインターネットと接続させることで、車同士の情報交換に行える。渋滞などの道路情報のほかに、道路の先の障害物情報や天候情報など、運転に必要な様々な情報がリアルタイムで送られてくるんだ」

「便利な時代になつたものね」

「モノ同士がインターネットで繋がっているってどういうこと？」

「I.O.Tが悪用されて、富田さんの自販機がやられたつてこと？」

「断定はできないが、そういうことも考えられるということだよ」

「I.O.Tが悪用されて、富田さんの自販機がやられたつてこと？」

「モノ同士がインターネットで繋がっていることで、確かに生活が便利になるけど、間違った情報が伝えられるとか、個人情報が流出するとか、セキュリティの面ではまだ、課題が残つていてね」

「I.O.Tが悪用されて、富田さんの自販機がやられたつてこと？」

「断定はできないが、そういうことも考えられるということだよ」

自販機荒らしは未解決なまま時が経過していった。

ある夏の朝。朝飯の席で妻が男に言った。

「昨日の夜、バイクや車の音がうるさくて眠れなかつたわ。それに何かにぶつかつたような音もしたわ。あなた、眠れた?」
「いや、目が覚めたよ。深夜にあんなに大きな音を出して車を走らせていれば、誰だつて目を覚ましてしまうさ。毎年、この時期の週末になると暴走族が騒いでいるね。それに、暴走族の車を追跡するパトカーのサイレンの音にも参つたよ」

普段は静かな夜の住宅街だが、毎年、夏になると騒がしくなる。
週末の夜、男の住む町から十五キロ先にある海岸道路をめがけて暴走族の車両が爆音をたてながら、家の前の道路を通過するからだ。暴走族の車両が爆音をたてながら、家の前の道路を通過するからだ。暴走族の車両が爆音をたてながら、家の前の道路を通過するからだ。

蛇行運転するオートバイや改造車両から出るクラクションの音と違法改造のマフラーから出るエンジン音が、寝静まつた住宅街を襲う。続いて、暴走族を取り締まるために追跡してきたパトカーから流れれるサイレンが静かな住宅街に響き渡る。

男の家の玄関前には暴走族グループが投げ捨てたと思われる空き缶やペットボトルが落ちていることがある。また、ガードレールに接触した際に外れたと思われる車の部品が落ちていていることもある。

月に二回、男の家に来る孫のためにと始めたペーパークラフトと家庭菜園であつたが、家庭菜園の方は手間がかかる。畑と違つてプランターに入れた土は水分の蒸発が早いため、朝晩の水やりは欠かせない。

ミニトマトの苗は順調に生育し、梅雨に入った頃には茎の背丈が伸びて枝や葉が横に広がつてきた。風で倒れないよう支柱を立てて支えた。施肥や雑草取りも必要だ。男は日が照り付ける昼間は避けて、朝晩の涼しい時間帯にこれらの作業を行つた。

子供の頃に経験した辛い農作業に比べれば楽な作業だと男は思つた。七月に入ると花芽が出てきた。花芽が出てくれば実ができる。来月には赤い実が収穫できるかもしれない。

ある朝、いつものように男がミニトマトを植えたプランターに水をやろうと、ジョウロの先をプランターの中に入れたところ、何やら光つているもののが見えた。男は光つていものを手に取つた。それはプラスチック製の白い板だつた。

板には金色の枠がはめ込まれている。どうやらICカードのようだ。先ほど光つて見えたのはカードに埋め込まれたICチップだつた。カードの表面は真つ白で文字などの意匠が施されていない。

家の前の玄関先には、時折、空き缶やペットボトルが捨てられていることがある。プランターに吸殻やたばこの空き箱が投げ捨てられたこともあつたが、このような異物が捨てられていたのは初めてのことだった。

男は手に持った真っ白なICカードを眺め、試作段階のカードではないかと思った。このカードにはどんな情報が入っているんだろうか？真っ白なICカードに記録されている情報を見たくなつた男は、カードを二階の自室に持つていき、パソコンに繋いだカードリーダーに、拾つたICカードを差し込んでみたが、読み取り不能のメッセージが画面に表示された。やっぱりだめか。男はカードリーダーからICカードを抜き取つて、本棚の隅に置いた。

ピーコー、ピーコー、ピーコー

ウーワー、ウーワ、ウーワー

明け暗れに、二階の自室で寝ていた男は救急車とパトカーのサイレンで目を覚ました。一階で寝ていた妻も、けたたましいサイレンの音に驚いて、二階に上がってきた。男は部屋のカーテンを開けて外を覗いていた。

「今、サイレンの音がしたけど。事故か何か、あつたのかしら？」

男の部屋に入つて来た妻が言つた。

「近くのコンビニで事件が起きたようだ」男が答えた。

妻も窓から外を覗いた。

男の家の並びにあるコンビニの駐車場には規制線が張られ、赤色の灯を点滅したパトカーと救急車が見えた。しばらくして、腕と手に包帯を巻かれた店員が救急隊員に付き添われて救急車に乗り込んだ。

ピーコー、ピーコー、ピーコー

怪我人を乗せた救急車が駐車場から出ていった。パトカーは赤色の灯を付けたまま駐車場に止まつてゐる。現場検証が続いているようだ。

眠られないまま朝を迎えた男は布団から起き上がって、部屋のテレビをつけてチャンネルをニュース番組に合わせた。男は、朝起きるとテレビのニュース番組を見るのが日課になつていた。

「未明のコンビニに強盗 売上金五十万円が奪われる」というテロップがテレビ画面に表示され、「今日の未明、午前三時頃。茨城県陽光市にあるコンビニエンス・ストア『エニータイム』に、マスクをした四十代くらいの男が客のいない店内に押し入り、店員にカツターナイフを突き付けたうえ、

店にあつた売上金約五十万円を奪つて逃走しました。警察では男の行方を追つていますが、まだ手掛かりはつかめていません。カッターナイフで切り付けられた店員の男性が手と腕に怪我をしました」と、アナウンサーが伝えた。

コンビニ強盗のニュースは何度かテレビで見たことがあるが、まさか自分の住んでいる町でこんな凶悪な事件が起きるとは思つてみなかつた。

「今朝のニュースで、未明に近所のコンビニで起きた事件を放送していましたよ。何でも四十代くらいの男が、カッターナイフで店員を脅して、店の売上金を奪つて逃走したそうだ」

男は朝飯の席で妻に言った。

「マスクをした四十代くらいの男?」「妻が男に尋ねた。

「そう。ニュースでは白いマスクをした男だと言つていたね」

「外国で起きたコンビニ強盗の映像をテレビで見たことがあるけど、怖かつたわ。目出し帽をかぶつた男が店員に拳銃を向けて、店員がレジから取り出した現金入りの袋を持ち去つた映像よ。この町に住んで三十年余りになるけど、身近な所でこんな怖い事件が起きたなんて、信じられないわ!」妻は動搖した様子で言つた。

「外国の事件と違つて、今回のコンビニ強盗の凶器はカッターナイフだつたけどもね。コンビニ強盗なんて余所事かと思つていたけど、君が言うように、自分たちの住んでいるこの町で起きたなんて、驚いたよ。物騒な世の中になつたもんだね」

「そうね。昔は銀行を狙つた強盗事件が時々あつたわ。ライフル銃を持つた犯人が行員やお客様を人質にして立てこもつた事件だつたわね。終日、テレビが事件現場を実況中継していたのを覚えてるわ」

「そうだね。確かに昔は銀行を狙つた強盗事件が多かつたようだけど、金融機関の防犯対策が進んだことや警察の見回りが強化されたことで、昔と比べれば、件数は少なくなつたんじやないのかな。その代わりに、二十四時間営業のコンビニが狙われるケースが増えたような気がするよ。それに、今回の事件のように目撃者や客の少ない深夜から未明にかけての犯行が多いみたいだね」

「コンビニ強盗じやないけど、私と同じ料理教室に通つている鈴木さんの娘さんが、ひつたりに遭つたそうよ。娘さんが夜遅く歩いて帰宅した時に、自転車に乗つた若い男が後ろから近づいてきて、娘さんのハンドバッグを奪つて逃げたんですつて」

「バグを奪われた時、転倒して膝に擦り傷を負つたそによ」

「女性が夜道を一人で歩く時には、護身用に防犯ブザーなどの道具を持つていた方がいいね」

男はこの住宅団地に移り住んで三十年余りになった。住宅団地のある一帯は、戦時中、広大な畑作地帯であった。戦後になつて工場団地が造成され、自動車や家電機器など輸出型製造業の工場がこの団地に立地した。男が勤めていた工場もこの団地の一角にある。地方出身の若者が「金の卵」となつて、これらの工場に就職した。男もその一人だつた。

会社は地方から出てきた若者に住まいを提供するために、工場団地の周辺に造成された住宅団地に社宅用の集合住宅を建設した。当時の工場は三交代制勤務で二十四時間稼働していくことから、工場と社宅の間をマイクロバスによるピストン輸送で従業員を運んだ。男も独身の頃はマイクロバスに乗つて社宅と工場を往復した。

その後、一戸建て用の住宅団地が造成され、マイホームを求める大勢の子育て世帯がこの団地に土地を買い求めた。男が家を建てた頃は、団地に建つてている戸建ての住宅はまばらであつたが、その後、最初に分譲に出された区画の全てが埋まつたことから、宅地開発業者は周囲に残つて いる畑を開発して、第二次の分譲団地として造成し売りに出した。

こうして男の住む住宅団地は徐々に拡張し、今や三万人余りの人口を抱える市街地に成長した。子供が急激に増えたことから、保育園や幼稚園、小中学校が新設され、市役所の出張所、交番、消防署などの官公署の公共施設も新たに建設された。

市街地の拡大に伴い、スーパーマーケットやコンビニ、ガソリンスタンドといったといった生活関連の店舗もできた。パチンコやカラオケルーム、居酒屋などの娯楽施設も人口の増加に合わせて建設された。

コンビニ強盗があつた数日後、男の家に刑事が尋ねてきた。
ピンポン　玄関の呼び鈴が鳴つた。
「はーい、どちら様ですか」

居間でテレビを見ていた妻が玄関に出た。
「ごめんください。警察の者ですが」
「はい。今、玄関を開けますから」

妻が玄関を開けると二人の刑事が入ってきた。刑事たちは警察手帳を見せて言つた。

「先日、この先にあるコンビニで起きた強盗事件について、お話を

伺いに来ました

「強盗事件？今、主人を呼びます。あなた、ちょっと来て！刑事さんよ」

妻が二階にいる男を呼んだ。妻からの呼び出しを受けて、男は一階に降りて来た。

「刑事さんよ。この前、近所のコンビニであつた強盗事件について、聞きたいことがあるんですって」

妻は夫にその場を引き継いで、居間に戻った。

「事件については、既にご存知ですかね？」刑事が尋ねた。

「はい。この町に住んで三十年余りになりますが、まさか近所でコンビニ強盗が起きるなんて、思つてもみませんでした。確か、夜中の三時頃だったと思いますが、救急車とパトカーのサイレンの音に気づいて目が覚めました。サイレンの音がだんだんと大きくなつてきましたので、こっちの方角に向かつているんだな、つて思つていたら、突然止まつたんで、近所で何かあつたんだなと思いました。布団から起き上がつて、外を見たら、コンビニの駐車場に救急車とパトカーの赤色灯が点滅していました。その後、包帯を巻いた店員が救急隊員に付き添われて救急車に乗り込んでいくのが見えました。朝のニュースを見て、事件の詳細を知りました」男は答えた。

「救急車やパトカーのサイレンの音が聞こえる前に、急発進する車の音は聞きましたか？」

「いいえ、聞いていません。救急車とパトカーが鳴らすサイレンの音で目が覚めたので、その前のことは眠つていたので分かりません。でも、刑事さんが今言つた、急発進するような車があれば、眠つていても分かつたと思ひます。もつとも、この時期、週末の深夜になると暴走族のバイクの音で嫌でも目が覚めてしまいますが……。妻にも聞いてみましょう」男は、居間に居る妻を呼んだ。

「今、刑事さんから聞かれたんだけど。救急車とパトカーのサイレンの音がする前に、車が急発進するような音を聞かなかつた？」

男が妻に尋ねた。

「救急車とパトカーの音がだんだんと大きくなつてきて、近所で止まつことしか覚えていないわ。週末の深夜を除けば、ここは静かな住宅街です。もし急発進する車があれば、寝っていても気づいたと思ひます」妻が言つた。

「深夜のコンビニに買い物に来る車もあると思いますが、買い物客の車の音は聞いたことがありますか？」刑事が尋ねた。

「国道のバイパス沿いにあるコンビニになら、深夜でも車で買い物に来る客はいるとは思いますが、こここのコンビニを夜間に利用している人の多くは、近所の人です。買物に行く場合でも、歩いて行くか自転車を漕いで行くかのどちらかだと思います」男が答えた。

「店の店員さんは、犯人が乗つて逃げた車は見ていないんですか？」男が刑事に尋ねた。

「犯人が店を立ち去った後、一一〇番通報をしていたので、犯人の車は見ていないし、車の音も聞いていないそうです」刑事は答えた。

「防犯カメラに犯人の車は写つていなかつたんですか？」

男が刑事に尋ねた。

「コンビニに向けて設置したはずの防犯カメラが、なぜかお宅の玄関の方向を向いていたんです」

「ええ、防犯カメラがうちの玄関に向いていたって！？」

男は驚いた様子で言つた。

「防犯カメラを設置した支柱に何かがぶつかつたらしくて、少し傾いていました。防犯カメラに保存されていた事件当日の記録映像を見たら、コンビニではなくて、お宅の家が映つていたんです」刑事は答えた。

「ええ、うちを映した映像ですつて！窓越しから家のなかが丸見えだわ！」妻が言つた。

「ご心配なく。今は、コンビニの方角に防犯カメラは向いていますし、お宅を記録した映像は既に消去しました」刑事は答えた。

「防犯カメラに記録されていた映像は、何日間、保存されているんですか？」男が刑事に尋ねた。

「最新の防犯カメラのなかには、長期間保存できるものもあるようですが、こちらの防犯カメラは一週間です。記録されて一週間経つと新しい映像に更新されます」刑事は答えた。

「防犯カメラは常時、モニターで見られる状態になつていてるんですか？」男が刑事に尋ねた。

「こちらの防犯カメラは商店街組合が設置したもので、カメラと専用回線で繋がれた組合事務所のモニターに写し出すことは可能です。モニターは一台しかなく、普段は事務所前に設置したカメラの映像を映していたそうです。ですから、こちらの家を映していたカメラには映像は記録されていましたが、組合の人々に見られていたということはなかつたようです」刑事が答えた。

「ああ、良かつたわ。組合の人々に家の中を覗かれていたのかと思つたわ」妻がほつとした表情で言つた。

。

「モニターに家が映し出されていれば、カメラの向きがおかしいと、もつと早く気づいたかも知れませんね」男が言った。

「そうですね」と言つて、年配の刑事が若い刑事にそつと目配せした。

「いろいろとお聞かせいただき、ありがとうございました。また、何か、事件について思い出したことがあれば、こちらにお電話ください」若い刑事が男に名刺を差し出して、刑事たちは帰つて行つた。

ある日、男が利用しているクレジット会社から利用明細書の葉書が届いた。男は明細書の封を開けた。先月の利用実績を見ると、身に覚えのないキャッシングの利用があつた。それも限度額いっぽいの百万円を借りている。

男は、これまで、買い物代金やホテルの宿泊代を支払う時などにクレジットカードを使つたことはあるが、お金を借りるためにクレジットカードを使つたことは一度もない。不審に思った男はクレジット会社に電話を入れた。

電話に出たオペレーターが本人確認を行うために、

「恐れ入りますが、お客様のカード番号と氏名、生年月日をお伺いします」と、男に質問し、男は答えた。

「どういったお問い合わせでしようか？」

本人確認を終えたオペレーターが男に尋ねた。

「実は、先月分の利用明細の中に、使つた覚えのない百万円の借り入れがあつたのですが……」と、男はオペレーターに告げた。

オペレーターは慌てた声で「少々、お待ちください。担当の者と替わります」と言って、電話は担当部署に回された。電話に出た担当者が男に尋ねた。

「私の方で、もう一度、確認させてください。お客様の先月分のご利用明細について、百万円の借入はなかつた、ということで、よろしかつたでしようか？」

「はい、そうです。全く身に覚えのない借り入れです」と、男ははつきりと答えた。

「少々、お待ちください」と担当者が言うと、電話は保留状態を示すメソセージ音が流れた。間もなくして電話は、先ほどの担当者に代わつた。

「お客様の百万円の借入は、兵庫県内にあるコンビニのA T Mから引き出されていましたが、お心当たりがありますか？」

「ええ、兵庫県内のコンビニで引き出されたって！私は生まれてこ

のかた、兵庫県に住んだこともないし、行つたこともありますんよ！」

「クレジットカードを落としたとか、盗まれたとかはありますか？」

「クレジットカードは今、手元にあります。半年程前に、カードを落としたことがありましたが、その時は、直ぐに、紛失したカードの失効手続きをとつて、新しいカードに更新しました。幸いなことに、紛失したカードが使われたことはなかつたようですが……」

「それでは、お客様はネット通販で買い物をしたことがございますか？」

「ネット通販？」

「失礼しました。『ネット通販』というのは、インターネット上の通信販売のことですが、これまでインターネットを使って買い物をしましたことはありますか？」

「ええ、何度かありました」

「商品の代金をクレジットカードで支払ったことはありますか？ネット通販で買い物をした場合、注文した商品を運搬した業者に代金を支払う『代引き』、指定された銀行口座に振り込む方法、コンビニで支払う方法、それとクレジットカードで支払う方法など、代金の支払い方法を選べますが、お客様はどのような方法でお支払いになりましたか？」

「最初の頃は代引きで支払つたりしましたが、手数料が別に取られるので、今はクレジット払いにしています」

「男は雄太との工作に使うモーターなどの金属製の部品を、インターネットを使って購入したことを思い出した。その時の購入代金はクレジットカードで支払つた。

「お客様がカードで代金を支払つた時、お客様の氏名や生年月日、カード番号、暗証番号などのカード情報をパソコン画面上で入力しますが、何か変だなと感じたことはありましたか？」

「確かに、模型に使う小型モーターを買った時だつたと思いますが、画面上にカード情報を入れた後に、突然、『ネットワークに繋がつていません』というメッセージが流れ、画面が途切れてしまつたことがあります」

「もしかして、お客様はフィッシング詐欺に遭われたのかも知れません」

「フィッシング詐欺？」

「インター ネット上に実在する通販サイトのページに似せた嘘のページを作つておいて、そのページに誘い、知らないうちに個人情報を盗む詐欺行為のことです」

「ええ、そうなんですか！私が詐欺に遭ったということですか？どうすればいいんでしょうか？」

「すぐに最寄りの警察署に行つて被害届を提出してください」

「ところで百万円の借入は、私が返済することになるのでしょうか？」

「警察に提出した被害届の写しを、こちらに提出していただければ、百万円の借入は利用明細から抹消されますので、ご安心ください」

「ああ、良かった。どうもありがとうございました」

男は担当者に礼を言つて電話を切つた。

男は、たつた今、二階の自室から携帯電話を使つてクレジット会社に利用明細の問い合わせの電話をした。男とクレジット会社との通話内容は、一階でいつものように家事ラインを回している妻の耳には届いていないはずだ。

男は、自分が詐欺に遭つたという話を、妻に内緒にしておいた方がいいのか、それとも食事の時の話題として提供すべきか迷つた。仮に男がこの話を出した時に妻がどのような反応を示すだろうか。顔には男の失態に対する軽蔑の笑みを浮かべながら、口からは同情の言葉を男に返す。そんな妻の反応が目に浮かぶ。詐欺に遭つたといつても、金錢が奪われたわけでもない。実害はない。妻に話して嫌な思いをするだけだと考えた男は、妻に話すのをやめた。

「全国二十都府県にある大手コンビニチェーン店の現金自動預払機（ATM）約千六百台で偽造クレジットカードとみられるカードが一斉に使われ、現金約一六億円が不正に引き出されたことが分かった。午前中の二時間余りのうちに全国各地で百人以上が偽造カードを使つて引き出しに関わった可能性がある。警察は、信販大手五社が発行するカード情報を基に偽造カードが作られたとみている。また背後に大がかりな犯罪グループが関与しているとみて、被害にあつたコンビニに設置された防犯カメラの映像を解析し、引き出した人物の特定を進めている」

記事には ATM での不正引き出しに使われた大手コンビニチェーンの名前と偽造カードに情報を書き込まれた大手信販会社の名前が掲載されていた。

被害に遭ったコンビニチェーンは先月、強盗事件のあつた近所のコンビニと同じチエーン店だった。それに偽造カードに個人情報が書き込まれた大手信販会社五社に男が利用している信販会社も入っている。

また、全国のコンビニATMから不正に引き出された日は、男のクレジットカードから百万円の借入金が引き出された日と同じ日だ。男の個人情報が半年前に紛失したカードから盗まれたものなのか、それともネット通販で買い物した時に盗まれたものなのか。男は記事を読み終えた後、自分の身に起きた事件を振り返った。

夕飯時に妻がこの事件を持ち出した。

「あなた。今朝の新聞を見た? 全国のコンビニチェーンのATMで、偽造カードを使って現金十六億円も引き出されたって事件だけど。現金を引き出されたコンビニチェーンって、この前、強盗事件のあつた近所のコンビニと同じチエーン店だわ」

「ああ、知っているよ。今朝の新聞に出ていたね」

「お昼のワイドショーでも大きく取り上げていたわ。百人以上の人々が千六百台のATMから一斉に引き出したっていうけど、そんなことできるのかしら。警察では犯罪グループによる組織的な犯行とみているそうよ」

「全国的な犯罪グループといえば暴力団が考えられるけど、暴力団員百人が不正に引き出したということは考えにくいね。暴力団員から雇われた『出し子』がATMから現金を引き出したんじゃないかな」

「何? その『出し子』って?」

「振り込め詐欺など、犯罪に使われた預金口座から現金を引き出す役のことだよ。それと、電話を掛けて相手をだます役を『掛け子』、現金を受け取る役を『受け子』って言うんだ」

「振り込め詐欺で思い出したけど、この前、町内会報と一緒に回ってきた防犯チラシに、一人暮らしのお年寄りを狙つた振り込め詐欺と見られる電話が増えているって書いてあつたわ」

「住所や電話番号など個人情報が知らないうちに、名簿業者によつて売買され、それが犯罪に使われてようだ。以前は、電話帳に個人宅の電話番号が載つていたけど、今は載せていないからね」

「確かに、電話会社から配布される電話帳にはお店や事業所の電話番号は載つているけど、個人の家の電話番号は載つていないわ。ところで、今回の不正引き出しに利用された個人情報は信販会社が発行するカードから盗まれたっていうけど、犯人はどうやって、カード

ドから情報を盗んだのかしら？」

「カード情報を盗む手口はいろいろあるけどね。『スキミング』といつて、カードの磁気ストライプに記録されている情報を、スキマ－という機器で盗み取る手口だけね」

「あなたが持っているカードは大丈夫だったの？ この前、ショッピングセンターで買い物をした時に代金をカードで支払っていたわね」
男は妻と一緒にランチを兼ねてショッピングセンターに行つた時のことを見い出した。雄太との工作用に使うスキヤナーを買った時、カードで代金を支払った現場を妻に見られたことを覚えている。

「私のカードはＩＣチップカードだから大丈夫だよ」「ＩＣカード？」

「ＩＣカードは今まで使われていた磁気カードと比べて、大量の情報を取り記録できるし、偽造されにくいという特徴を持っているんだ。クレジットカードが、セキュリティの強化されたＩＣカードに移行したことで、スキミングはできなくなつたね。今はやつている手口は、『ネット通販』といって、インターネット上の通販サイトで買った商品の購入代金をカードで支払う際に、パソコンの画面上にカード情報を入力した時に盗まれるケースだよ」

「この前、雄太と工作する時に使う材料。そういう小型のモーターよ。確かにインターネットで買ったつて、言つてたわね。その時にあなたの方カード情報をだつて盗まれたかも知れないわ」

「最初から個人情報を盗む目的で開設した偽の通販サイトだつたら、そういうこともあるかも知れないけど、僕が小型モーターを購入した通販サイトは本物のサイトだつたし、カード情報が盗まれるなんてことは、絶対にないよ！」男は嘘をついた。

「そう、分かつたわ。さつきも言つたように、今回、ＡＴＭの不正引き出しが行われたコンビニチェーンは先月、強盗事件があつた近所のコンビニと同じチエーン店だわ。不正引き出しに使われたのかしら？」

「千六百台のＡＴＭの中に、先月、強盗事件のあつた近所のコンビニが含まれているのかは分からぬ。店の売上代金が奪われた強盗事件と違つて、被害者は店じやなくて、カード情報を盗まれた個人や信販会社だからね」

コンビニＡＴＭからの不正引き出しがマスコミ報道されてから一週間ほど経つたある日、男の家に刑事が尋ねてきた。妻は友人とラ

ンチを食べに出掛けた留守にしていた。男は、妻が作り置きした昼飯を食べた後、二階の自室で今週の土曜日に孫の雄太と工作する乗り物の試作品を作っていた。

「ピンボーン 玄関の呼び鈴が鳴った。男は二階から降りて来て玄関の引き戸を開けた。

「ごめんください。警察の者ですが……」

「二人の刑事が警察手帳を見せて言つた。

「ご苦労様です」と、男は答えた。

「既に、新聞をご覧になつてご存知だと思いますが、コンビニチェーン店『エニータイム』のATMから現金が不正に引き出された事件について、お話を伺いたくて参りました」若い方の刑事が言つた。

「その事件のことなら知っています。新聞の記事に書いてありますたが、偽造されたクレジットカードを使って千六百台のATMから、現金十六億円が不正に引き出された事件ですよね？」

「そうです。この先にあるコンビニ店のATMも不正引き出しに使われました」

「ええ、そうだったんですね！同じコンビニチェーン店ですから、もしかして不正引き出しに使われたんじゃないかなって、妻と話をしていましたが……。先月、強盗事件があつたばかりなのに、今度は不正引き出しですか」

「御主人はファイッシング詐欺の被害届を出された野上徹さんですね？」

「はい、そうです。被害届を出したのは私です。どうやら、私のカード情報も盗まれて、今回の不正引き出しに使われたようですが、犯人はどうやつて私のカード情報を盗んだんでしょうか？偽の通販サイトにカード情報を入力した時なのか、それとも紛失したカードから情報が盗まれたのか、どっちかだと思ってるんですけど……」

「今回の不正引き出しに使われたカード情報は約二千人分です。その中のお一人が野上さんです。はつきりとは分かっていませんが、野上さんのケースでは偽の通販サイトを利用した際に盗まれたものと思われます」

「他にもあるんですか？」

「紛失や盗難に遭ったカードから情報が盗まれることもあれば、お店で買い物をした時に提示したカードから情報が盗まれることもあります」

「今、使われているクレジットカードはICチップが埋め込まれて

いるので、以前使われていた磁気カードよりもセキュリティが強化されていると聞いています。」

「ICカードだから、絶対に大丈夫だという保証はないんです。『サイバー攻撃』という言葉をご存知だと思いますが、インターネットなどの通信回線で繋がっている個別のサーバーやパソコンに侵入して情報を奪つたり、改ざんしたり、破壊したりする犯罪行為ですが、警察と犯罪者とのいたちごっこの状態です。野上さんも、パソコンにウイルス対策ソフトを入れていると思いますが、ソフトを更新しないと新種のウイルスに対応できなくなります。情報通信技術は日々刻々と進化していますからね」

「警察は、今回の不正引き出しは、組織的に行われたものと見ていいそうです。」

「そのとおりです。今回の事件は三つのグループが関与したものと考えています」

「三つのグループ？」

「つまり、情報を盗んだグループ、盗んだ情報を基に偽装カードを作ったグループ、偽装カードを使って現金を引き出したグループの三者が連携して行つた犯罪だと考えています。」

「例えば暴力団のような組織ですか？」

「そうですね。ATMからの不正引き出しには暴力団組織が関わっています」とみています」

「この事件の捜査は進んでいますでしょうか？」

「正直言つて、難航しています。カード情報が盗まれた時点、その情報が不正使用された時点、カード利用者が不正使用されると認識した時点、これら三つの時点にあるタイムラグ、情報が盗まれた場所とその情報が使われた場所に関連性が無いこと、不正使用が広範囲に及んだこと、物証が限られていること、などが上げられます」

「そうですね。私のカード情報も、いつ盗まれたかも分からなかつたし、それに住んだこともなければ、行ったこともない兵庫県内のコンビニ店で使われましたからね。私の場合、カードの利用明細書を見て、身に覚えのない支払いがあることに気づきましたからね。」

なかには気づいていない人もいるんじゃないでしょうか？」

「考えられますね。今回被害に遭つた信販会社では、会員に利用明細をチェックするように注意喚起のお知らせをしたそうですが、今後、被害届は増えてくるものと考えています」

「先ほど物証が限られているというお話をありましたか？」

「どういうことですか？」

「今確認されているのは、コンビニのATMとつながった信販会社のコンピューターに記録されている支払い記録と、コンビニに設置されている防犯カメラに記録されている出し子の映像です。ただし、記録された映像は三週間経つと新しい映像に上書きされるので残つていませんでした。犯罪グループが、『エニータイム』を犯行場所に選んだ理由は、防犯カメラに記録された映像の保存期間が他のコンビニチェーン店よりも短かつた点が挙げられます」

「犯罪グループは、綿密な調査と周到な計画を立てて実行したんですね」

「おっしゃるとおりです。実は、今日、野上さんをお尋ねした本当の理由は、新たな物証を得るためです」

「新たな物証？」

「不正引き出しに使われた偽造カードです。通常、カードをATMに入れるとき、機械はそのカードが正規のものか非正規のものかを瞬時に判別して、非正規のものであれば飲み込んでしまうんです。キヤツシユカードの暗証番号を三回間違えると、カードが機械に飲み込まれてしまうのと同じ仕組みです。しかし、今回、犯罪に使われた偽造カードは機械に飲み込まれることなく、カード情報を読み取つた後、機械から排出され、出し子の手元に戻つたと考えています。しかし、その偽造カードを野上さんがお持ちだという情報提供があつたのです」

「ええ！ 私が偽造カードを持つているって！？ 私が偽造カードで不正引き出しをしたってことですか！」男は興奮気味に言つた。

「いいえ、そうじやないんです。野上さんはプランターでミニトマトの栽培をしていますよね。先ほど見たら赤い実が何個か付いていましたが……」

「はい、孫娘の食育にと春から始めたものですが……」

「そのプランターの中に、プラスチック製の真っ白なカード、大きさは名刺大のものですが、見つけたと思いますが……」

「刑事さんはどうして、そのことを知っているんですか？」

「後でお話します」

「分かりました。確かにプラスチック製の白い板を見つけました。カードの表面には文字などの意匠が施されていない、のっぺらぼうの板でした。カードの中央付近には金色の枠、たぶんICチップだと思いますが、はめ込まれていました。ICチップに記録されてくる情報を見ようと、カードリーダーを入れてみましたが、情報は読み取れませんでした」

「野上さんはそのＩＣカードを今でもお持ちですか？野上さんの部屋の本棚に保管しているそうですが……」

「どうしてそんなことまで、刑事さんは知っているんですか？」

「後でお話します」

「ちよつと待つてください。今、そのカードを持つてきます」

男は二階の自室から白いカードを持ってきて、刑事に渡した。

事は白いカードを手に持つて言つた。

「野上さんがこのカードを見つけたのは、一ヶ月半ほど前だつたと思ひますが……」

「そこまでご存知なんですか。刑事さんの言うとおりです。土曜日の深夜、暴走族が爆音を上げて通りを走つた日の翌々日、月曜日だつたと思います。しかし、どうして私しか知らないことを刑事さんは知つているんですか？私がその偽造カードを所持していることを警察に伝えた情報提供者つて、いつたい誰なんですか？」

「野上勇一さんつて方です。あなたの兄なんだそうですね。勇一さんから、あなたが偽造カードを持っているという連絡がありました」

「ええ、勇一だつて！そんな事あるわけないですよ！勇一は私の一番上の兄ですが、十四歳の時に水の事故で亡くなりました。もう五十年も前の話ですが……」

「そうですか。情報提供者は偽名を使つたんでしょうか。いずれにせよ、大事な物証ですから、このカード、お預かりします。また、何かありましたら、こちらにご連絡ください」

刑事は男に名刺を渡して帰つて行つた。

男は茫然として、その場に立ちすくんだ。五十年前に亡くなつた長兄が警察に連絡するなんてあり得ないことだ。もしかして妻が警察に連絡したのだろうか。いや、そんなはずはない。私がミニトマートのプランターから真っ白なＩＣカードを拾つたことや、そのカードを二階の自室に保管していることは、妻にも内緒にしている。このことを知つているのは私以外にいないうはずだが……。

刑事が男の家に来てから一週間後、近所のコンビニ店のＡＴＭから現金を不正に引き出した出し子と、出し子に指示を与えていた暴力団組員が逮捕された。また、他の店舗のＡＴＭで不正引き出しに関わつた出し子と、背後にいる暴力団組員も逮捕された。警察では、現在、偽造カードの入所ルートの解明に向けて捜査を続けていると

ある日のこと。男はいつものように二階の自室に籠つて、今度の土曜日に雄太と作る乗り物の試作品作りに取り組んでいた。男の器用な手さばきで机の上に広げた厚紙から、乗り物のパーツが次から次へと切り取られていく。男は時折、疲れた首を持ち上げると、写真立てに入つた一枚の写真と向き合う。色あせた写真には、神社の境内に据えられた神輿の前で、男と亡くなつた長兄の勇一、次兄の健二の三人が法被姿で立つていて。男は勇一に向かつて呟いた。

「偽造カードのことを警察に知らせたのは、勇一兄さんかい？」

男は勇一に促されるように、パソコンのスイッチを入れて電子メールの受信一覧を確認した。野上勇一名義のメールを見つけた男は真っ青になつた。男は早速、そのメールを開けた。

野上 勲 様

徹。私はお前の兄、勇一だ。元気で暮らしているようだな。会社を定年退職してからは、孫の雄太と乗り物の工作をしながら、第二の人生を楽しんでいるようだな。私の方は、お前と違つて十四歳で人生を閉じてしまつた。あの日の事故以来、私は自分の残りの人生をお前と共に歩むことにした。事故で私の肉体は消滅したが、私の魂は今でも存在し続けている。お前には感じないかも知れないが、私の魂はお前の体の周辺を漂つていて。

時折、お前の体を借りて私の欲望を満たすこともあるが……。この前は雄太の体を借りて、近所の自販機でアイスクリームを買つて食べた。その日は朝から暑い日だったので、冷たいアイスは本当に美味しかつた。言つておくが、ちゃんとお金を払つて買つているので、自販機荒らしではないぞ。アイスクリームを買った時にお守りを落としてしまつた。お前と健二と私とで秋祭りに参加した時に神社からもらつたお守りだ。

さつきも言つたように、私には肉体はないが魂は残つてゐる。実家の仏壇には私の命日になるとお菓子が供えられるが、死んだときには子供だったが、今は数えで六十五歳になつた。酒を飲みたくなる

ところで、コンビニのATMから現金を不正に引き出した事件で、物証になる白いカードをお前が持つていてことを警察に通報したのは私だ。犯人と思われる人物が、お前が大切に育てているミニトマトのプランターに真っ白なICカードを落としたのを、私は防犯カメラを通して見ていたよ。翌朝、お前がそのカードを拾つて、二階の部屋の本棚に保管していたのも知つていて。

時だつてあるさ。明日は私の命日だ。三人が写つてゐる秋祭りの写真立ての前に、冷えた缶ビールを供えてくれ。最後に言つておくが、このメールは雄太の体を借りて、雄太のパソコンを使つてお前に送信した。徹、長生きしろよ。私はお前といつも一緒だ。勇一より

コンビニ強盗事件の方は、それから一ヶ月後に犯人が検挙された。検挙された男は暴走族グループの一員で、事件のあつたコンビニに以前、働いていた元従業員であつた。この元従業員は、現金を奪つた後、走つて逃げ、犯行現場から百メートルほど離れた国道バイパス沿いにあるコンビニに止めてあつた車に乗つて逃走したという。しかし、自販機荒らしの犯人は、今も検挙されていない。(了)